

令和7年度学校自己評価システムシート（立志舎高等学校）

目指す学校像	学校生活を通して社会の規範・規律を守り、地域に認められ、社会に必要とされる人材の育成を目指す。
--------	---

重点目標	1 生徒の学力状況に応じた支援を通して、基礎学力の定着と主体的に学ぶ姿勢の育成を図る。 2 円滑なコミュニケーション力を育み、思いやりある行動ができる生徒の育成を目指す。 3 基本的な生活習慣と社会的ルールを身につけ、自分の行動に責任をもって生活できる生徒を育成する。 4 自己理解を深め、主体的かつ計画的に進路選択・実現ができる力を育成する。
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	5名
	生徒	0名
	事務局(教職員)	1名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学 校 自 己 評 価					年 度 評 価 (3 月 31 日 現 在)		
年 度 目 標					年 度 評 価 (3 月 31 日 現 在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	基礎的な学力が十分に定着していない生徒が一定数在籍している。高校の授業内容についていけず、学習意欲の低下や授業への不参加につながるケースが見受けられる。また、定期試験において合格点に達せず、単位修得が困難となる生徒もいる。生徒一人ひとりの学力状況に応じた支援を行い、基礎学力の定着と学習意欲の向上を図ることが課題である。	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が生徒の基礎学力の定着状況を適切に把握できているか ・学力差に配慮した授業展開や学習支援が行われているか ・主体的な授業演習の実施 ・単位修得に向けた継続的な学習体制が整っているか 	1 確認テストや授業内課題等を活用し学力状況の把握と早期対応を行う 2 必要に応じて、補習や個別指導を実施し、学習機会の確保に努める 3 定期的な授業見学の実施を行い、担任・教科担当・学年が連携していく 4 定期試験前後に学習相談やフォローを行い、単位修得に向けた具体的な学習計画を支援する	1 確認テスト等で各生徒の学力状況を把握し個別に指導できているか 2 学力差に配慮した学習支援が行われたか 3 教職員間の連携が図られ、授業や指導の改善に生かされているか 4 学習状況に応じた支援により、単位修得に向けた取組が適切に進められているか	確認テストや授業内課題を計画的に実施し、生徒一人ひとりの基礎学力の定着状況を把握する体制を整えた。学力が不十分な生徒には早期に面談や補習を行い一定の改善が見られた。授業では学力差に配慮した段階的指導や主体的な学習活動を取り入れ、理解度に応じた支援を実施した。授業見学や情報共有を通して教員間の連携を図り、単位修得に向けた支援体制も概ね機能しているが、学習習慣の確立にはなお課題が残る。		次年度は、年度当初の基礎学力診断を充実させ早期に学習状況を把握するとともに、確認テスト結果をデータ化し教職員で共有する体制を整備する。少人数指導や習熟度別課題を推進し、家庭学習計画の提示と振り返りを徹底する。さらに、単位修得が困難な生徒を早期に把握し、担任・教科担当・管理職が連携した重点支援を行い、自己効力感を高める指導で学習意欲の向上を図る。
2	昨年度、さまざまな取組を行ってきたものの、いじめ等の対人関係トラブルは十分な減少には至らなかった。特に、インターネット上における友人関係のトラブルは増加傾向にある。円滑なコミュニケーションの不足が課題として挙げられる。今後は、相手の立場を理解し、思いやりをもって行動できる姿勢を、生徒一人ひとりに身につけさせる必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒間トラブルの未然防止 ・早期対応が組織的に行われているか ・SNSに関する適切な利用指導とトラブル防止教育が実施されているか ・いじめ・友人間トラブルの報告数が減少しているか ・生徒が相手の立場を考え、思いやりをもった行動をとろうとする意識が育成されているか 	1 LHRや道徳教育の時間を増やし、思いやりを育てる指導をしていく 2 年2回いじめアンケートを実施し、早期発見対応に繋げる 3 担任による個別面談を適宜実施するとともにSC等の活用をしていく 4 外部講師や資料を活用したネットリテラシーと責任ある行動について理解を深める	1 生徒が相手の立場を考え、行動をとろうとする意識が育成されたか 2 年2回いじめアンケート実施し、対応を行ってきたか 3 生徒が相談できる体制が整い、悩みが早期に表面化する環境が確保されているか 4 外部専門機関と連携した支援が実施できたか	LHRや道徳の時間を活用し思いやりを育てる指導を行うとともに、年2回いじめアンケートや個別面談により早期発見・対応に努めた。外部講師によるネットリテラシー指導も実施し、相談体制の周知も進めたが、SNS上のトラブルは依然として発生しており、未然防止の取組にはなお課題が残る。		次年度は、日常的な声かけや観察を強化し、小さな変化を見逃さない体制を徹底する。SNS利用に関する具体的事例を用いた指導を充実させ、保護者とも連携した啓発を進める。アンケート結果の迅速な共有と組織的対応を徹底し、生徒が安心して相談できる環境づくりを一層強化する。
3	不登校であった生徒も多く、校則や最低限の社会的ルールに対する意識が十分に身につけていない者や、登校時間をはじめ基本的な生活習慣が確立していない生徒が多く見受けられる。こうした状況を踏まえ、社会生活において必要とされる基本的な規範意識を身につけさせるとともに、自ら行動を律する力を育成することが課題である。	<ul style="list-style-type: none"> ・校則である社会的ルールの意義を理解し、日常行動に反映できているか ・基本的な生活習慣(時間厳守、身だしなみ、挨拶等)が定着しているか ・教師からの注意指導に対し、自らの行動を振り返り、改善しようとする姿勢が育成されているか 	1 遅刻指導、服装指導等生活指導の継続実施と工夫を行う 2 一律の指導に終始せず、生徒の能力や背景・理由を確認しながら指導を行う 3 生徒への指導後には、必要に応じて保護者へ連絡を行い、情報共有を図る	遅刻・服装違反等の件数が減少しているか、指導後に行動改善が見られるかを指標とする。生活習慣の定着状況を学期ごとに確認し、面談記録等で振り返りが行われているかを検証する。また、保護者との連絡件数や連携内容を共有し、家庭と協力した継続的支援が実施できたかを評価する。	遅刻・服装指導を継続し、個別事情を踏まえた対応に努めたことで一定の改善が見られた。保護者との連携も図り、生活習慣の定着に向けた支援を行った。しかし、時間管理や規範意識が十分に定着していない生徒もおり、自律的な行動改善には継続的支援が必要である。		次年度は、入学当初から規範意識の意義を丁寧に指導し、具体的事例を通じて理解を深める。生活記録の活用や定期的な振り返り面談を実施し、自ら行動を改善する力を育成する。家庭との連携をさらに強化し、学校と家庭が同じ方針で支援できる体制を整える。
4	入学段階から計画的にキャリア教育に取り組んできた。しかし、自身の将来や進路について主体的に考える意識が十分に高まっていない生徒も見受けられる。また、進路に対して具体的な目標設定ができず、自身の学力や適性を十分に踏まえないまま、希望のみが先行しているケースもある。そのため、進路実現に必要な学習や日常行動が伴わず、進路選択に向けた準備が不十分となっている生徒もいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が将来や進路について主体的に考える姿勢が育成されているか ・自己理解(学力・適性)に基づいた現実的な進路目標設定ができているか ・各学年が連携した計画的なキャリア教育が、生徒の進路意識向上につながっているか 	1 面談を通じて、学力や適性を踏まえた現実的な進路選択について助言を行う 2 保護者と情報を共有し、家庭と連携した進路指導を行う 3 外部講師の講話等を活用し、主体的な進路意識を育成する 4 教員同士が連携し、生徒の進路意識や学習状況を共有する	1 生徒が自身の学力や適性を理解し、現実的な進路について考えることができているか 2 面談等を通じて保護者と進路に関する情報を共有し、同じ方向性で生徒を支援できたか 3 外部専門機関と連携した進路支援が実施できたか 4 全教員での進路会議等を実施し、生徒の進路・学習状況が共有されたか	面談や外部講師講話を通じて進路意識の向上を図り、保護者とも情報共有を行いながら支援を進めた。進路会議により教員間で状況共有も実施できた。一方で、自己理解が十分でなく、希望先行の目標設定にとどまる生徒もおり、主体的に将来を考える姿勢の育成にはなお課題が残る。		次年度は、低学年段階から自己分析や職業理解の機会を増やし、学力データを活用した具体的助言を強化する。保護者との三者面談を充実させ、現実的目標設定を支援する。学年を越えた情報共有を徹底し、学習行動と進路目標を結び付けた継続的指導体制を構築する。

学 校 関 係 者 評 価	
実 施 日 令 和 年 3 月 31 日	
学 校 関 係 者 からの 意 見 ・ 要 望 ・ 評 価 等	
生徒一人ひとりの学力差や習熟度に応じた指導ができていた。特に特色であるゼミ学習による学習は生徒の基礎学力向上において成果を残した。一方、生徒自身の学習習慣の定着について 学習意欲が持てない一部の生徒に対する対応については課題が残っている。研修等による職員自身の知識・指導技術の研鑽や外部講師等の活用についても工夫する余地があると考えられる。	
教員のいじめに対する認識は深まってきていると考えるが現状いじめ問題に関しては依然として多い。生徒にはいじめアンケートを年二回で実施。生徒が相談出来る環境は整ってきている。しかし二回目のアンケート調査に関してはスキー研修や年末による作業圧迫の為、迅速に吸い取ることが出来ず次年度への課題となった。昨年度、クラスになじめなかったり、人間関係でうまくいっていない生徒への居場所づくりとして『チルアウトルーム』を設けた。ここでは教員に気軽に相談できる場所を教室以外で設けた。また、引き続きSCも実施。保護者との連携体制を徹底。早期に発見、改善の強化に努める。	
不登校の生徒を受け入れている中で、指導の在り方を見直す必要がある。従来の一律的な指導に加え、生徒の状況に応じた柔軟な対応が求められる。また、定期的な面談も重要であるが、日々の声掛けを通じた継続的な関わりがより大きな意味を持つ。さらに、教員間で指導内容や基準に差が生じないように共通認識を形成し、指導の統一を図っていくことが必要である。	
面談や外部講師講話の活用により、低学年から進路意識の向上を図ることには一定の成果があったと評価できる。また、デジタル教材を導入し、一定期間実施しその結果を保護者面談等で共有することで、生徒自身の自己理解や他者理解を深めることができた。しかし今年度は低学年を対象とした試験的な実施だったため、次年度はその対象範囲を拡大しかつ長期に継続することで、その実質的な効果を観察する必要がある。そうすることで生徒自身が早期かつ主体的に目標設定ができることを期待する。	